

いつのまにやら、春爛漫。今冬は当地では雪かきの少ない楽な冬でしたが、関東や東北では豪雪でした。最近の気候は、本当に極端です。

2月4日、5日と開業以来初めての臨時休診で、皆様にはご迷惑をおかけしました。お蔭様で下肢静脈瘤は順調に軽快しました。術後3か月間は弾性ストッキング着用ですが、当初の違和感にも慣れて下肢のたるさも軽くなってきました。中学生の時に虫垂炎で入院して以来のことで、緊張しましたが手術台では、まな板の上の鯉の心境でした。

さて、4月に入って消費税が8%と上がり、2年に1度の診療報酬改定も行われました。2025年に、いわゆる団塊の世代のピークの方々が75歳を迎えます。厚労省はそれに向けて在宅医療を中心とした地域包括ケアシステムを整備していく計画です。今回の改定もその流れに沿っています。



【最近目立つ病気】

インフルエンザは例年どおり1月中旬ごろから流行がはじまり、初めはA型、後にB型が流行しました。大きなピークはなく、だらだらと流行が続いている感じです。春休みに入って終息するかと思われましたが、新学期がはじまって再びA型、B型ともにみられ出しました。最近の傾向としては、おそらくゴールデンウィーク頃までは注意が必要でしょう。

アデノウイルス感染症は冬の間も流行がつづき、今後もこの状態がつづくと予想されます。半年間に2回アデノウイルス感染症に罹患した子どももいます。

ウイルス性胃腸炎は例年どおり、ノロウイルスが猛威をふるっています。暖かくなってみられなくなっています。3～5月はロタウイルスが流行する時期ですが最近重症のロタウイルス感染症を診ることが少なくなっています。おそらく、乳児期早期のロタウイルスワクチン接種が功を奏しているのだと思います。全くの私見ですが、接種者が任意接種のため少ないにもかかわらず流行を抑えられている要因として生ワクチンが周囲の乳児にも感染して効果を発揮しているのではと思っています。

溶連菌感染症と水痘も例年どおり流行中です。一年中みられますが、寒い時期に多い感染症です。

おたふくかぜが一部で流行しています。近年の流行は約4年周期です。過去の流行は2001～2002年、2006年、2010年となっていますので今年も流行年になるかもしれません。

【おたふくかぜ】

流行性耳下腺炎（おたふくかぜ・ムンプス）は2～3週間の潜伏期（平均18日前後）で発症し、片側あるいは両側の唾液腺の腫脹を特徴とするウイルス感染症です。通常1～2週間で軽快します。最も多い合併症は髄膜炎であり、その他髄膜脳炎、睾丸炎、卵巣炎、難聴、肺炎などがあります。唾液腺腫脹は両側、あるいは片側の耳下腺にみられ、顎下腺、舌下腺にも起こることがあります。

通常発症から2～3日でピークとなります。接触、あるいは飛沫感染で伝播しますが、感染力はかなり強いのです。ただし、感染しても症状が現れない不顕性感染も多く、30～35%とされています。鑑別を要するものとして、他のウイルス、コクサッキーウイルス、パラインフルエンザウイルスなどによる耳下腺炎、反復性耳下腺炎などがあります。反復性耳下腺炎は片側の耳下腺腫脹を何度も繰り返し、軽度の自発痛がありますが発熱を伴わないことが多く、2～3日で自然に軽快します。流行性耳下腺炎に何度も罹患するという場合は、この可能性もあります。

合併症としての無菌性髄膜炎は軽症と考えられていますが、症状の明らかな例の約10%に出現すると推定されます。思春期以降では、男性で約20～30%に睾丸炎、女性では約7%に卵巣炎を合併するとされています。また、1000例に1例程度に難聴を合併すると言われており、永続的な障害となるので重要な合併症のひとつです。（以前は2万例に1例と言われていましたが、最近の調査では1000例に1例となっています。）その他、稀ですが肺炎も重篤な合併症の一つです。任意接種ですが、合併症が多いので是非ワクチンを受けてください。麻疹・風疹ワクチンと同じように1歳から2歳までに1回、就学前1年の間に2回目を接種されることが推奨されます。

【A型肝炎】

2014年のA型肝炎の報告数は、第3週以降急増しています。感染経路は、経口感染が推定された149例（84%）のうち、24例（16%）で生かき、2例（1%）で生ホタテ、8例（5%）で刺身を食べていました。

A型肝炎はA型肝炎ウイルス（HAV）による疾患で、一過性の急性肝炎を起こします。2～7週間の潜伏期間ののち、発熱、全身倦怠感、食欲不振、悪心・嘔吐、黄疸などの症状が出ます。治療法は安静や対症療法が中心ですが、多くは1～2か月の経過で回復し慢性化しません。

まれに劇症化（0.1%）して死亡することがあります。治癒後には強い免疫ができます。小児では不顕性感染が80～95%と多いため、時に無症状のまま、集団発生の感染源となります。成人では、顕性感染が75～90%です。通常、年齢が上がるに従い、重症度も上昇し、A型肝炎の症例全体の致死率は0.1%以下ですが、50歳以上では2.7%に達します。2003年に実施された血清疫学調査の抗A型肝炎ウイルス抗体保有率から推測すると、現在の55歳未満のほとんど全員が免疫を持っています。今後急速な高齢化が予測されるわが国では、A型肝炎の症例数および重症例の増加が懸念されています。HAVは糞便中に排泄され糞口感染によって伝播します。国内の感染経路としては、魚介類の生食などによる経口感染や、性的接触などが推定されます。

【ワクチン最新事情】

水痘（水ぼうそう）ワクチンは、今年の10月以降、定期接種となる予定です。1歳以上3歳未満で3か月以上の間隔で2回接種されます。今年度に限り3歳以上5歳未満の者は経過措置として1回の接種が受けられる予定です。



☆大手町の夜間急病診療所（TEL:222-0099）では午後7時から11時まで、小児科と内科の診療を年中無休で行っています。加畑の担当は5/25、6/22、7/13、8/3の予定です。また、5/4は当番医です。

☆金沢市では今年度も幼児期の任意接種のワクチン（水痘・おたふくかぜ・インフルエンザ）についての助成金制度を行っています。詳細は受付でお尋ね下さい。

☆5月からすこやか検診がはじまります。

☆世界の宝「憲法9条」を次の世代に贈りましょう。

